



作家  
元国際線乗務員  
**黒木安馬**

【プロフィール】高校時に米国留学後、早稲田大学を経てJAL国際線客室乗務員として30年勤務。世界初の「カラオケ・フライト」や「1万メートル上空・北島三郎機上コンサート」などを実現させる。千葉の自宅は1300坪の山林を開墾してプール、テニスコート、コンサートホール等を手作りする。現在、(株)日本成功学会社長として自己啓発や社員教育で講演中。著書に「ファーストクラスの心配り」、「あなたの人格以上は売れない!」(プレジデント社)、「成「幸」学」(講談社)、「出過ぎる杭は打ちにくい!」(サンマーク出版)、「面白くなくちゃ人生じゃない!」(ロングセラーズ)、「小説・球磨川」(上下巻・ワニブックス)などがある。  
E-mail:yasuma@myad.jp URL:http://www.7b.biglobe.ne.jp/~sanpercent-club/

21世紀だ! ————— 人生・農業リセット再出発 210

# 香水MITSOUKOと映画カサブランカ

「タベはどこに行っていたの?」「昨日? 遠い過去すぎて覚えちゃいないな!」「今夜、逢える?」「今夜? そんな遠い先のことなんか考えたこともないね!」。映画「カサブランカ」で、ハンフリー・ボガードが女に言うセリフだ。舞台はアフリカ北西端部のフランス領モロッコの港街カサブランカ。

**実**はこの映画のモデルは、日本人を母に生まれ、明治維新後の1874年、東京牛込で骨董品屋を営む青山喜八とツネに三女の光子が生まれた。欧州五大列強国の一国、オーストリア＝ハンガリー帝国から1892年に駐日大使としてクーデンホーフ伯爵が赴任してきた。青山光子は大使公邸の小間使いとして働くが、大使の落馬による怪我を看病するうちに二人は大恋愛に陥る。19歳の光子は大使から結婚を申し込まれるが、異人の現地妻だと周囲に猛反対される。大使は本気で東京府に正式に婚姻届を出して、東京が受理した初の国際結婚届となる。東京で長男のハンス光太郎と次男のリヒャルト栄次郎が生まれる。大使は4年の任期を終えて、光子と子どもを連れて帰国する。

クーデンホーフ家は、ボヘミアとハンガリー一帯の広大な領地を有する超名門、そこに東洋人妻が混血の子連れで現れたから大騒ぎになった。「光子は伯爵夫人だ。堂々と振る舞いなさい」と大使は励まし、「妻を白人扱いしない輩には決闘を申し込む」と社交界に宣言した。伯爵は子どもたちを完璧なヨーロッパ人として教育するため、日本語の使用を禁じた。陰口を言われながらも光子は家庭教師をつけて猛勉強した。だが、1904年の日露戦争で貧しい日本が大国ロシアに勝ってからは周りの目が変わった。伯爵が急死して莫大な遺産を相続し、「クーデンホーフ・カレルギー・ミツコ」の名が社交界の花になり、ゲラン社の香水「MITSOUKO」が世に出る。しかし、第一次世界大

戦でドイツと共に敗戦国となって帝国は崩壊、領土を没収される。

**時**に、東京生まれのリヒャルト栄次郎は19歳のウィーン大学生。ユダヤ美人女優イダ、34歳、子連れで二度の離婚歴あり、その15歳年上の女性と結婚して光子に勘当される。栄次郎の人種差別と戦争の苦悩は“国境を取り外した欧州連合”構想に向かう。イダの貯金で「汎ヨーロッパ社」を設立、欧州統一を目指す。ヒトラーは、ユダヤ人の迫害に走った。反ナチ運動リーダーの栄次郎は妻を連れてパリに逃走し、ドイツ軍に抗戦するレジスタンス「自由フランス」の幹部になる。

欧州統一国を説く「汎ヨーロッパ」を出版すると、ヴィクトル・ユゴー、チャーチル、アインシュタイン、トーマス・マン、フロイド、リルケなどが絶賛し、ユーロ構想の下敷きとなる。第二次世界大戦へ突入、ナチと戦いながらユーロ統合運動を続ける。ヒトラーがパリに侵攻したので、中立国ポルトガル経由でアメリカ亡命を計画する。

**リ**スボンから大西洋横断船でニューヨークへのルートだが、ビザはカサブランカで発行される。夢を求めてアメリカ行きを目指す者がごった返して、ビザ発行待ちをしている混沌の港町。そこには紳士淑女とフランス警察、ドイツ軍将校たちなどが夜毎に集まるカジノクラブ「カフェ・アメリカン」があった。経営者は、なんと栄次郎が投獄されている最中にイダが大恋愛した末に別れたアメリカ人リックだった。そのリック役にハンフリー・ボガード、女優イダはイングリッド・バーグマンが、そして栄次郎の役はポール・ヘンリードが扮する。栄次郎とイダは、リックのなんとも粋な計らいで、渡米に成功する。

1999年に栄次郎の壮大な夢が叶って大ユーロ圏が成立する。「EECの母・伯爵夫人ミツコ」は、欧州の伝説である。